

# 汽車の中のくまと鶏

小川未明

青空文庫



ある田舎の停車場へ汽車がとまりました。その汽車は、北の方の国からきて、だんだん南の方へゆくのでありました。どの箱にも、たくさんな荷物が積んでありました。どこかの山から伐り出されたのであろう、材木や掘り出された石炭や、その他いろいろなものがいっぱいに載せられていました。その中の、一つの箱だけは、扉がひとところ開いていました。そして、その中には、黒い鉄のがつしりしたかごの中に、一頭の大きなくまが、はいつていました。

北の寒い国で捕らえられた、この力の強い獣物は、見せ物にされるために、南の方へ送られる途中にあつたのです。しかし、くまには、そんなことはわかりませんでした。ただ太い鉄棒でつくられたかごの中へ入れられて、そのかわいらしい円い目で、珍しそうに、移り変わってゆく、外の景色をながめていたのでありました。このくまにも、親や兄弟はあつたのでありましょう。しかし、それらは、いま険阻な山奥に残っていて、捕らえられたくまのことを思い出しているかもしれないませんが、そのくまの故郷は、だんだん遠くなってしまうたのです。このくまも、やはり毎日駆けまわった山や、谷や、河のことを思い出しているのかもしれないませんでした。そのとき、ちようど停車場の構

内に、鶏が餌をさがしながら歩いていました。ふと鶏は頭をあげると、貨車に鉄のかごがのせられてあつて、その内から真っ黒な怖ろしい動物が、じつと円い光る目で、こちらを見ているのに出あつてびっくりいたしました。鶏は、コツ、コツ、といつて、友だちを呼ぼうとしました。すると、くまは、穏やかに話しかけました。

「私は、おまえさんをどうしようとするのではない。こんなかごの中へはいっているのでは、どうすることもできないではありませんか。私は、先刻から、おまえさんが餌を探しているのを見ていたが、なぜそんな砂地などをあちこちと歩きまわつて、見つかりもしないのに、餌などを探しているのですか。おまえさんの大好きな米も、豆も、きびも、どこの野原にもたくさんあるじゃありませんか。なぜ、それを取つて食べないのです。」

鶏は、怖ろしいと思つたくまが、あまりやさしいので、二度びっくりいたしました。

「そうですか、どこにそんなにたくさん、米や、きびがあるのですか、教えてください。」と、鶏はいいました。くまは、かごの格子の目から、大きな体に比較して、ばかに小さく見える頭をば上一下に振つて、あたりをながめていました。

「なるほど、ここは家ばかりしか見えませんか。私は、ここまでくる長い間、どれほど、あなたがたが自由にすめる、いい場所を見てきたかしれません。おそらく、これからゆく

先の途中にも、そんなようなところを見るでありましょう。幸いまだれも見えていません。おまえさんは、私の乗っているこの貨車の中へお入りなさい。そして、いいところへ、私がつれていつてあげますから。」と、くまはいいました。鶏は、きよときよとした目つきで、くびを伸ばしてあたりを見まわしました。

「ほんとうに、だいじょうぶでしようか？」

「だいじょうぶですとも。私は、かごの中へ入つてもほえられません。もし、だれか私たちのいるところへやつてきたなら、私は、ほえてやります。みんなは怖ろしがつて、私たちに、近づくものはないでしょう。」と、くまはいいました。くまの力強い言葉に、小さな鶏はまったく打たれてしまいました。そして、ついには、うす暗い貨車の中へ飛び上がりました。

「汽車の出るまで、あのすみにしやがんでいなさい。」と、くまはいいました。鶏は、くまのいうままにしました。だれも、鶏の貨車に入つたことを気づくものがありませんでした。そのうちに笛がひびいて、ゴト、ゴト、と鳴って、汽車が動きはじめました。しばらくするとくまは、このときまで、まだ、うす暗い片すみにじつとしている鶏の方を向いて、「もうだいじょうぶだ。だれも、ここへはやつてこないから安心なさい。そして、まあ

ここから、ちよつと外そとをのぞいてごらんなきい。あんなにきびが実みのつているじやありませんか。あちらの田たには、あんなに米こめが実みのつているじやありませんか。おまえさんがどこへ降りおりようとかつてなんだ。」といいました。鶏にわとりは、怖おそる怖おそる、扉とびらの開あいたすきまから、外そとをながめました。田たも圃はたけも、見渡みわたすかぎり黄色きいろに実みつていました。

「なるほど、みんな熟じゆくしていますね。しかし、私わたしたちがあれをとつて食たべたら、人にんげん間が怒おこるでありましょう。」

「だれが、それを見みているものですか。かつてに降おりて、食たべるがいい。」と、くまはいいました。鶏にわとりは、震ふるえながら、「あぶなくはないでしょうか。こんなに汽き車しゃは疾はやく走はしつています。」といいました。

これを聞きくと、くまは、さげすむような、また、あわれむような目めつきをして、鶏にわとりをながめていました。そしていいました。

「おまえさんは、羽はねを持もつているじやないか。なんのための羽はねなんですか。私わたしは、羽はねなどはなくつても、この体からだが、自由じゆうになれば、すぐにもここから飛とび降おりてみせます。そして、この広ひろい野原のほらも縦じゆう横おうに駈かけるであろう。」と、くまは、かこの外そとの自然しぜんに憧あこがれるのでした。

「ああ、自由に放たれていて、しかも、羽すら持ちながら、それができないとは、なんという情けないことだ……。」と、くまは、はがゆがりました。汽車は、いくつかの停車場にとまりました。けれど鶏は怖がつてどこへも降りることができませんでした。晩方になると、鶏は、心細がりしました。

「私は、どうしたらいいでしょうか。」と、ため息をもらしながら、くまに向かつて聞きました。

「おまえさんなど、どこだって餌がたくさんにあつて、すみよければいいじゃないか、自由がいいところを探すのだね。」といいました。すると鶏は、さびしそうな顔つきをして、「いいえ、私には、そんなことができませぬ。あなたのいうことを聞かなければよかったです。昨日まですんでいました小舎が恋しくなりました。」と答えました。

「そんなことをいったつて、もうだめだ。遠くなつてしまつて帰れやしない。」と、くまはいいました。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「汽車《きしゃ》の中《なか》のくまと鶏《にわとり》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 汽車の中のくまと鶏

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>